



山田孝六全集

第六卷

平井呈一 訳

恒文社

全訳
小泉八雲作品集 第六卷

〔第三回配本〕
定価一、八〇〇円

日本警見記 (下)

昭和三十九年八月十日 印刷
昭和三十九年八月二十日 発行

訳者 平井 呈一

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町三の二一
電話(二〇一)七五四一―四番(代)
振替口座(東京)三五八二四

印刷所 共同印刷株式会社

落丁・乱丁の場合はお取りかえいたします。

全訳

小泉八雲作品集

第六卷

目次

日本瞥見記（下）

第十六章	日本の庭……………	三
第十七章	家庭の祭壇……………	五
第十八章	女の髪……………	七
第十九章	英語教師の日記から……………	二四
第二十章	二つの珍しい祭日……………	一八六
第二十一章	日本海に沿うて……………	二〇〇
第二十二章	舞妓……………	二二七
第二十三章	伯耆から隠岐へ……………	二六五
第二十四章	魂について……………	三三五
第二十五章	幽霊と化けもの……………	三七〇

第二十六章	日本人の微笑……………	三六
-------	-------------	----

第二十七章	さようなら……………	四三
-------	------------	----

八雲と日本(その一)……………	平井呈一……………	四七
-----------------	-----------	----

日本瞥見記
(下)

第十六章 日本 の 庭

一

大橋川のほとりの二階建てのわたくしの寓居は、鳥籠のような瀟洒なすまいだったが、おいおい暑さに向かつてきてみると、なにぶんここでは、手足をらくらく伸ばして暮すには少々手狭なことがわかつてきた。どのへやも、天井の高さが船の船室^{ケビン}ぐらいしかない、狭いへやばかりなので、並^{なみ}の蚊帳がつれないという始末なのだ。美しい湖水の景色が見られなくなるのは残念だったが、けっきょくやむをえず、まえのところよりもすこし北に寄った、荒れはてた城裏の閑静な町の方へ移転するよりほかになかった。こんどのすまいは、甲冑屋敷^{かちゅう}といって、むかし高禄のサムライが住んでいた、古い屋敷の一軒である。ここは、城の外堀にそうた通り——というよりは、小路だが——とは、瓦をふいた高い土塀でしきられていて、寺の境内にあるような大きな門があり、その門まで、幅の広い低い石段があつて、それを登つてはいってくるよう

になっている。門の右手に、木造の大きな鳥籠とでもいいたいような、太い格子のはまった武者窓が、塀から突きでている。武家時代には、この窓から、大小をつけた家来が往来の通行人を見張っていたのである。見張りといっても、窓の格子は棧さんが繁間しげまに打ってあるから、そのかげにゐる人の顔は、往来からは見えない。つまり、そこからは見えない見張りをしていたわけである。門をはいると、母屋おもやまで、やはり両側にずっと塀がしきつてある。だから、来訪者は、とくに許してもえないかぎり、ただつきあたりには、白い障子のたてきつてある玄関しか見ることができない。サムライ屋敷というと、どこもそうであるが、ここの家も、すまいは平屋建である。そのかわり、中にはいると、座敷が十四室もある。どの室も、みな天井の高い、畳数の多い、りっぱなへやばかりだ。ただ残念なことに、この家には、湖水の眺めと美しい見晴らしがひとつもない。お城山の一部が、公園の松林になかば隠れて、家の前側の築地つじ塀の屋根の上から見えることは見えるが、それとてほんの一部にしかすぎない。屋敷の裏手に、百ヤードほどの空地があるが、ここは樹木がうっそうと茂った山がかりになっていて、それが眼界をさえずっているばかりか、空まで大きく限ってしまったている。ただ、この幽居には、母屋おもやの三方を、美しい庭——というよりも、ひとつづきの庭地がぐるりと囲んでいるので、それでどうやら埋め合わせがついている。このひとつづきの庭を、いくつかの広い縁側が、それぞれの位置から見晴らしているわけであるが、ある縁側の角からは、二つの庭を同時に眺めて楽しむこともできる。竹と藨よしを編んでつくった網代垣あじろがきが、この三つの庭の境界になっていて、垣には、しおり

戸などのついていない入口が、それぞれまんなかについている。垣とはいっても、じつは垣根の用もなさなような、ほんの飾りのしきりで、ただ、ここからこの流儀の庭のつくりがはじまり、ここでそれが終っているということを示すだけの、ほんのけじめの境界にすぎない。

二

ここで、日本の一般の庭について、二、三のことを述べておこう。

日本のあの生け花の技術、あれをいくらでも学んでみると、——もともと、ひとくちに学んでみるといっても、花道なるものの実際の知識をうるためには、美に対する先天的な直感力のほかに、長年の研究と経験を要するから、せいぜい、目で見て学ぶという程度にとどまるけれども、とにかく、あの日本の生け花というものを学んだあとは、たれしも、西洋人の生花の飾り方に対する考えがじつに野蛮な、不趣味きわるものだということを、つくづく考えさせられる。この所見は、けっして一時の軽率な随喜讃からうまれたものではない。日本の内地に長年住んでみて、そのうえではじめてうちたてられた確信である。そういうわたくしなども、ようやくこの頃になって、日本の生け花の師匠だけがその技術をこころえている、あのわずかひと枝生けただけの花の枝の、なんともいえない美しさ、——それを生けるには、ただ花を花瓶にむざとつき挿したりするのではなく、おそらく、一時間もためつすがめつ苦心をして、あ

るいは枝をはさみ切り、あるいはかっこうをため直し、いろいろ手先で風雅な細工を加えて、そうして生け上がった花の、あの何ともいえない美しさが、どうやらわかるようになってきたくらいである。ところで、それがさてわかってみると、われわれ西洋人のいわゆる bouquet（花束）などというものは、それこそ不風流な花の殺生、色彩観念に対する冒瀆、いや暴行であり、醜行であるとしたか、今のわたくしには考えられないのである。それとほぼ同じように、またそれとほぼ同じ理由で、日本の古い庭園がどんなものであるか、それを知ったうえで、われわれの国にある、あの金のかかった庭園を思いおこしてみると、あんな庭園こそは、人間の「富」というものが「自然」を侵害して、そこに不調和きわまるものをつくりあげ、その結果そこにどんな実を結びうるか、それを知らない無智さかげんを、思いきってさらけ出したものによりほかに考えようがない。

ところで、日本の庭は、花園ではない。また、花や植木を栽培するのが目的でつくられるものでもない。まず十中の八、九まで、花床に似たようなものは、なにひとつそこにはない。どうかすると、緑の小枝一本すらない庭さえある。そうかと思うと、これはまあ異例であるが、ある庭のごときは、青いものはひとつもなく、岩と小石と砂ばかりでできているものもある。^{*}だいたいにおいて、日本の庭は、山水の景をかたどった庭であるが、山水の景だからといって、べつにそれは、ある一定の広さに準拠しなければできないというものではない。一エーカーのところでもできれば、数エーカーのところでもできるし、ほんの十フィート四方ぐらいのそこ

ろでもできる。もっと極端なばあいになると、それよりもまだ狭い場所でもいいのである。ある種の日本の庭になると、床の間に置けるほどの小ささにも、くふうできるのがあるくらいだ。そういう小さな庭は、くだもの鉢ほどの大きさもない容器のなかにつくられる。これを「コニワ」、もしくは「トコニワ」といい、人家と人家の間にぎゅう詰めになって、屋外の庭をつくる余地のないような貧しい小住宅などの床の間に、よくこういうのを見かける。（屋外の庭と今言ったが、日本の大きな家になると、階上にも階下にも「屋内庭園」があるので、そう言ったのである。）この「コニワ」は、ふつう珍しい鉢とか、くりぬいた浅い木の箱だとか、あるいは英語ではちょっと形容のできない、変った形の器などのなかにつくられる。そのなかに、小さな小文字のような山をこしらえ、山の上には、小さな小文字のような家を置き、虫めがねで見るような池や小川に、かわいらしい反り橋をかけたたりする。小さな珍木が森や木立の役をとめ、形の珍しい小石が岩のかわりに据えられ、かわいらしい灯籠に、かわいらしい鳥居。――要するに、日本の山水の景の、生きた美しい雛型である。

＊ コンダー氏が書いているトクワモンジの院主の屋敷の庭などがそれで、この庭は、仏陀の教えに同意した石がおじぎをしたという伝説をゆかりに造られたものである。鳥取県の東郷池でも、ほとんど全部石と砂からできている、広い大きな庭をわたくしは見た。ここの設計者がつたえようとした印象は、砂丘をいくつか越えて海へ近づいていくという感じのものであったが、この幻覚はうつくしいものであった。

それから、もう一つおぼえておくべき重要なことは、日本の庭園美を理解するためには、ぜ

ひとつ、石の美しさを理解すること、——すくなくとも、理解することを学ぶ必要があるということだ。人間の手が細工を施した石の美しさではない。天然自然によって形のそなわった石の美しさである。石に性格があること、また石に色調と明暗があること、これを深く感じとることができないうちは、日本の庭がもっている全体の審美的意義は、とうてい諸君のまえに開現されることはおぼつかない。ことに外国人のばあいは、その人がどれほど審美眼をもっている人であっても、この感覚は、勉強によって育てあげて行かなければだめだ。日本人は、生まれながらにしてこの感覚を身にそなえている。「自然」をあるがままの形において理解する——すくなくともその点では、日本人の心性は、われわれ西欧人よりも、量り知れないほどはるかにすぐれている。そういう西欧人だから、諸君がほんとうに石の美しさを感じ得るには、よほど長く日本人の石の使い方、石の選び方を親しく見なれないと、なかなかそこまでは行かない。しかし、諸君が日本の内地で暮らしさえすれば、諸君の得たいとおもうお手本の文字は、それこそ諸君の身の辺の到るところに、ざらにころがっている。ちよつとそこの町を歩けば、諸君の修むべき石の美学の問題集は、見まいとしても目にはいつてくる。寺院の入口、道のはた、鎮守の森の前、さては到るところの公園・遊園地、あるいは墓地などに行くと、大きな、形のぶぞろいな、平たい自然石——たいていは、水の流れに磨滅されたままのを川床から運んできたもの——があるのに、目がとまるだろう。それらの石は、文字こそ彫ってあるが、ほかに切ったり削ったりはしてない。これらは奉納の記念碑だとか、墓石などに立てられている石

碑であるが、こういう自然石の方が、なまじ四角四面に切った石柱や、神仏の像を浮彫りにした墓石などよりも、ずっと値段が高いのである。それからまた、たいていの神社の前、——神社にかぎらず、大きな屋敷ならその庭先に、谷川の水に洗われて角の丸くなった、自然のままでの大きなミカゲ石か、堅い自然石が、頭のところに丸いくぼみをくりぬいて、手水鉢ちょうずにしてあるのを見かけるだろう。こんなのは、それこそどんな貧しい村へ行っても見られる、ごくありふれた石の利用法の例であるが、かりに諸君が、多少でも生得の美的感覚をもちあわしているとする、これらの自然石が、石工の手に切り刻まれたどんな加工石よりも、どれほど美しいかということ、遅かれ早かれ、かならず発見されるにちがいない。さらにまた、もしも諸君がこの国を広く旅して歩かれるならば、そうした石のおもてに刻まれている文字に、やがて目が慣れてこられるだろう。そうになると、表意文字にもいわば自然の法則があつて、石の形によつて、文字のあるなしがきまっているかのごとく、この石なら文字がない、この石なら文字がないはずだと、文字のない石、ないはずの石に、べつの彫刻、あるいは碑銘のようなものを、しぜんと捜すようになってくるだろう。そうなつてくると、石というものが、諸君のまえに、日本人が感ずるのと同じように、ある気分なり感じなりを呈示してくる。——つまり、言いかえれば、個性とか相貌とかいうものを、そうした石が暗示してくるようになる。火山質の高燥な国には、どこにもありがちなことだが、とくに日本の国は、石の形に暗示的なものが多い国だ。されば、しぜんそういった形の石が、「岩根木根立ち、青水沫あおみわも事問こととひて」などと、

出雲の国の禍津神の^{まがつがみ}ことをいった、あの上代の神^{かむ}賀^{はぎ}詞^{ことば}よりもさらに古い時代には、きつと日本民族の想像力に強く訴えるものがあつたに相違ないのである。

天然物の形からくる暗示が、こんなふうに認識されている国では、おそらくそういうこともあるうと想像されたとおり、日本の国には、石に関する奇妙な信仰や迷信がじつにたくさんある。ほとんどどここの地方へ行っても、靈石とか、化け石とか、靈駿の力のある石とか、そういうたぐいの有名な石が、数知れずある。たとえば、鎌倉八幡宮の女石、那須の殺生石、参詣者がありがたがつて拜む江の島の福石などは、みんなそれだ。また、なかには、物に感應する性質をあらわした石の伝説さえある。たとえば、釈迦のいったことばを説いてきかせたら、大燈国師にお辞儀をした石だとか、応仁天皇が御酒^{みさけ}に酔われて、「御杖^{みつゑも}以ちて大坂^{おほさか}の道^{みち}の中^{なか}なる大石^{おほいし}を打ちたまひしかば、其の石^{いし}走り^{はし}り避^さりぬ」と、「古事記」の古い伝説のなかに出てくる石などが、それだ。

* この文章を書いたあとで、コンダー氏が「日本の造園」という美しい絵入り本を出版した。——“Landscape Gardening in Japan. By Josiah Conder, F. R. I. B. A. Tokyo : 1893” 附録の写真には、「東京その他の名園の景観」がのせてある。

ところで、石は、石としての美しさに値打があるわけで、形が美しいために選ばれた大きな石などになると、その美的価値が何百ドルもするのがある。そして、そういう美しい大きな石が、日本の庭の骨組をなしているのである。庭のなかや家のまわりに据えてある石は、そ

の一つ一つが特異な形をあらわしているために選定されているばかりでなく、どの石にも、その石の目的と装飾的な役目をあらわした名称が、いちいちつけてある。しかし、こうした日本の庭の民間伝承については、まだわたくしはほんの僅かしか——いや、ほとんど諸君に語ることができない。日本の庭石、庭石の名前、または日本の造園術について、さらにもっと知りたいたいという方は、コンダー氏の「日本造園術」に関する卓説、おなじく同氏の「日本の華道」に関する美しい著書、ならびにモールズの著書「日本の家庭」の中の「庭園」を論じた、簡単ではあるが、興味ふかい文章を、併せ読まれよ。^{*}

^{*} レイン博士の日本の庭園に関する觀察は、正確さという点でも、また問題の理解という点でも、あまり推薦できない。レインはわずか二年を日本に過ごしたのみで、それも大部分はもっぱら、漆工業、絹、紙の製造その他の實際的な方面の研究に費したのである。その部門の問題については、かれの述作は正しく評価されるが、日本の風俗習慣、芸術、宗教、文学に関する章は、かんじんの題目について知ることがきわめて少ないことを示している。

三

日本の庭園では、じつさいにありもしないような山水の景——つまり、純理想的な山水の景を、苦心してこしらえるようなことはけつしてしない。ありのままの風景の趣を忠実に写し出すこと、現実の風景のあたえる現実の印象、これをそのまま伝えること。——これが日本の造園術の目ざすものである。であるから、日本の庭は、それ自体がすでに一幅の絵であると同時に